第57回　日文研フォーラム

■

徳川時代思想における荻生徂徠

Ogyu Sorai in Tokugawa Japanese Thought

■

オロフ G. リディン
Olof G. Lidin

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長　梅原　猛

● テーマ ●

徳川時代思想における荻生徂徠

Ogyuu Sorai in Tokugawa Japanese Thought

● 発表者 ●

オロフ G. リディン
コペンハーゲン大学教授
Dr. Olof G. Lidin
Professor, University of Copenhagen

1993年10月12日

発表者紹介

オロフ　G. リディン
Olof G. Lidin
コペンハーゲン大学教授
Professor, University of Copenhagen

1926年、スエーデンに生れる。スエーデンのウプサラ大学を1951年に、ストックホルム大学を1955年に卒業。米国カリフォルニア大学バークレイ校より1963年に修士号を、1967年に博士号（荻生徂徠の研究）を取得。1959-65年、カリフォルニア大学バークレイ校助手、 1965-68年、カリフォルニア大学デイビス校講師を経て、 1968-69年、カリフォルニア大学バークレイ校助教授。1969-74年、及び 1976-80年、デンマークのコペンハーゲン大学東アジア研究所所長。1969- 73年、スエーデンのルンド大学でも教鞭を取る。1972年よりコペンハーゲン大学教授として現在に到る。1979-82年、ヨーロッパ日本研究学会の事務局長を、1982-85年、同学会の会長を務めた。1992年12月から1993年11月の一年間、国際日本文化研究センター客員教授として来日。専門は徳川時代の思想史。

主な著書

Ogyu Sorai, Life and Philosophy, with Translations, An Arbor, Michigan, 1968

Ogyu Sorai's Distinguishing the Way, Tokyo, 1970

The Life of Ogyu Sorai, A Tokugawa Confusian Philosopher, Lund, 1973

Ogyu Sorai's Journey to Kai in 1706, with a Translation of the Kyochukiko, London, 1983

Japans Religioner, Copenhagen, 1985

Abe Kobo no Kokusaishugi, Shinchosha, Tokyo, 1988

人間の想像力は不思議です。他の動植物には、そんな想像力は見つかりません。おそらく人間だけが想像力という力を持っていますので、他の動植物と随分違います。

しかし、人間の想像力にも限界があります。もし、想像の〈種〉がなければ、想像力はもっと乏しくなります。

今の小説家は良い例です。常に自分の経験にこだわってロマン小説を書いていますので、現代の小説は東西を問わず、私小説になります。徳川時代も同じであったと思われます。現実の次に、想像と小説と哲学はついてきます。ある面で何年か前は、想像力の点で、サイエンス・フィクションの方が現実よりも先でありましたが、今日では科学の進歩の次にサイエンス・フィクションがあります。このように、サイエンス・フィクションの世界でも、現実が第一、想像力は第二、であります。極端な例を挙げると、金丸元副総理の事件でしょう。この事件を想像できた小説家がいたでしょうか。これこそ「事実は小説よりも奇なり」です。も

ちろんまもなく、「金のサークル」か、「ゴールデン・サークル」というテーマに基づいた色々な小説が現われるでしょう。そうなれば、金丸さんは想像の〈種〉になったといえます。

私の祖国、スウェーデンは良い例です。今のスウェーデンの小説は乏しく、ほとんど読む価値はないと思います。小説の想像の種が無くなったからです。ヴァイキングの精神が失われ、福祉の物質主義に生きているので、小説の想像の〈種〉がほとんど消えてしまいました。同様にテレビドラマも、とても退屈なものになっています。これが良いのかどうかは、わかりません。もし、スターリンの横暴な事件という現実がなければ、ソルジェニーツィン－Solzhenitsyn（一九一八－）－はあのような小説を書くことが出来たでしょうか？　きっとこの時代に関しての小説はひとつも現われなかったでしょう。そしてノーベル賞も受賞しなかったでしょう。ノーベル賞は、スターリンのおかげだったのでしょうか？

この他に、才能という要素もありますが、ここでは省きましょう。

次に荻生徂徠（一六六六－一七二八）について記します。生まれも育ちも江戸でした。彼の父親は幕府の医者でしたが、徂徠が十三才の頃に事件を起こし、上総（千葉県）に流されてしまいました。十二－三年の流罪の刑を受け、家族と一緒に田舎で生活をしました。徂徠の十三才頃から二十四才頃までのことで、この時代は彼のその後の考え方に非常に大きな影響を与えました。彼の考えの一つの〈種〉になったといえます。例えば、彼の最後の書物、〈政談〉のなかで上総の経験を参考にしています。

一六九〇年頃に江戸に戻り、増上寺の近くで、貧乏な生活が始まりました。儒学を勉強して、哲学者を目指していたからです。彼は上総にいた時にも儒学を勉強しており、この勉強を増上寺のお坊さんと一緒に続けました。六年後、お寺の住持のおかげで、側用人、柳沢吉保（一六五八－一七一四）の官邸に移って、三〇才で柳沢吉保お抱えの儒者になり、その後死ぬまで儒者として仕えました。しかし、一七〇九年の柳沢の退任後、下町に移り儒学の学校を設立しました。その一七〇九－一七二八年の間に独自の哲学をつくり、一七一七年頃から著名になっていきます。

これが彼の簡単な履歴です。一言で言うと、彼は江戸で生まれて江戸で死んだ、本当の江戸っ子でありました。上総の十三年間を除いては、一度だけ一七〇六年に柳沢のために甲斐の国（山梨県）に行っただけで、旅行もしませんでした。伊藤仁斎（一六二七－一七〇五）を、京都っ子というならば、徂徠は江戸っ子であり、伊藤仁斎の古学の精神が京都の影響を受けているとするなら、徂徠は江戸の雰囲気に影響されたといえます。

伊藤仁斎の哲学も荻生徂徠の哲学も二人とも、同じ出発点から始まりました。徳川時代の政治と経済の状況のもとで、彼らは想像の〈種〉を得、彼らの哲学は発展しました。中国から伝わった儒学が、彼らの想像の次の〈種〉になりました。彼らの時代は徳川封建制度による典型的な縦社会であり、その時代の中で彼らは、独自の哲学の足場を築いたのであります。よって、儒学の中でも朱子学が中心でありました。彼らの考え方はいつもこの儒学の枠の範囲から出ることはありませんでした。このことが、私の意識を引いた最初のポイントです：仁斎と徂徠の想像は決して儒学の枠組みから離れず、中国の思想は彼らの思想の〈種〉でありました。

しかし、儒学の枠組みの中で、二人とも自分の位置をとっていました。若い時から宋代の朱子学に影響されて、そろって朱子学者になったと思われます。しかし後には、二人とも朱子学を離れて独自の、いわゆる古学を樹立しました。古学とは簡単に言うと、儒学の正統派であり、宋代の朱子学を批判しながら、もっと古い儒学の思想に帰ろうとしたものです。

日本の思想史における古学の代表者といえば、山鹿素行（一六二二―一六八五）、伊藤仁斎、荻生徂徠の三人であります。徂徠は、他の二人とは異なった古学の思想者でありました。山鹿素行と伊藤仁斎は二人とも、孔子と孟子の時代に戻って、孔子と孟子の書物の中に、紀元前四、五世紀の哲学の思想を探していました。徂徠はもっと古い思想を求め、真相を中国の一番古い古典の中に探していました。そしてついに、本当の真相と真実は中国の六経にあると結論づけました。古い中国、三代―夏、殷、周―の〈先王聖人〉は、「天下国家を治むる道」―先王の道―を作ったので、彼らだけが聖人で、彼ら以外は聖人ではありませんでした。つまり、孔子も孟子も聖人ではありませんでした。

このように徂徠は、聖人の信奉者－聖人原理主義者、英語でなら“Confucian fundamentalist”即ち、正統派でありました。古い中国の十人ほどの聖人（堯、舜、禹、湯、文、武等）だけが聖人であって、これ以外の聖人は、後の中国にも、もちろん日本にも決していませんでした。このように徂徠は、矛盾しているように思われますが、真の“realist”でありました。

国家の道は六経にあるので、学者、特に儒学者は、この道を理解するために学問を必要とします。そしてまず、先王の教えである、詩－書－礼－楽、を学びます。

この先王の教えは、

「和風甘雨の万物を長養するがごとし。万物の品は殊なりといへども、その、養ひを得て以て長ずるものはみな然り。竹はこれを得て以て竹を成し、木はこれを得て以て木を成し、草はこれを得て以て草を成し、穀はこれを得て以て穀を成す。なほ人の先王の教へを得て、以てその材を成し、以て六官・九官の用に供するがごときのみ。そのいはゆる善に習ひて善なりといふも、またその養ひを得て以て

材を成すを謂ふ。」

と、〈弁名〉に述べられています。

もし人間が、詩－書－礼－楽を学んだら、彼もまた竹と木と草のように長養できると徂徠は言っています。徂徠は中国の古典、特に六経の研究に重点を置き、彼の学校では、いわゆる古文辞学が中心でした。彼の学校では、中国人のように、中国語で習わなければなりませんでした。もし、中国語を翻訳してしまうと、言葉の本当の意味とニュアンスを失ってしまうからです。聖人の思想を確実に把握するために、古典の中国語も現代の中国語も理解しなければなりませんでした。徂徠自身は、おそらくこのような中国語の理解ができましたが、彼の学生達が理解できたかどうかは疑わしいと思います。

徂徠の学問には、常に、聖人の道を習うという目的がありました。荀子が「学問は聖人になる」と言ったのに対して、徂徠は「学問は聖人の道を習うため」としていました。

徂徠の古学は、一七一七年頃、彼が五〇才を過ぎた頃から発展し始めました。それ以前の彼の思想も、古学といえなくはありませんでしたが、彼の二つの本、〈弁道〉と〈弁名〉（一七一七）で初めて、彼の古学がはっきりと現われました。この二つの本で彼は、朱子学を厳しく批判し、自分の聖人に関する考えを表わしました。六経をきっかけとして、人間と、人間の社会を新しく解釈しました。朱子学と仁斎に反して、人間の性は善ではないと示しました。彼が「聖人の言わざるところなり」と述べているように、聖人は性については、はっきりとしたことを言っていなかったから、徂徠は、性について中立のスタンスをとっており、性善か性悪かについては、「無用の弁」であると述べていました。

孟子から朱子と、伊藤仁斎にいたるまで、すべての人間には聖人になる可能性があると強調していました。彼らは皆、「仁の道」に及ぶことを訴えました。徂徠はそのように楽天的ではなく、人間が自然に聖人になる徳はないと考えました。人間は個人的に才能を持っているが、この才能は天性のものではなく、天と性のつながりは、直接にはありません。各々が持っている個性的な才能を発達させて、社会の役に立つことができます。もちろん人間はそれぞれ違うので、結果もまた、

文人になる人もいれば軍人になる人もいるといったように、それぞれ違っています。天とのつながりではなく、人間の個人的な才能次第である、ということなのです。

しかし、徂徠は〈弁名〉で、「気質なるものは天の性なり」と述べているように、天とのつながりを否定したわけではありません。性は人間の気質であり、人間が天からいただいたものなのです。

徂徠にとって、性は才に匹敵し、その上、人間は心を持っており、心の真ん中には志－人間の意志－があります。「心は人間の主宰である」と〈弁名〉に述べています。人間の心理的な構造はこのようなものであり、この人間の、志、心、性、を養うために、聖人－先王の礼楽の教えがあります。心をコントロールするために聖人の楽－music－があり、性を養うために聖人の礼があります。

徂徠は〈政談〉（およそ一七二七年頃）のなかで人間を三つのグループに分けました。

「勝れて能き賢才と勝れて悪き人とは各別の事、其外の人何れも同様なり。」と述べています。人間は皆、個々の気質の性を持っているので、得手不得手は人間によって違い、それを養うことによって、違うものになれる可能性もあります。下々の人間も、才によって役人になることができます。気質を発展させるために、六経の中の先王の聖人の教えが必要で、古典の教育が必要なのです。

このように、個性的な人間が、徂徠の思想の中に生まれました。人間は一様に天性の才を持つものではなく、天とのつながりを持つものでもありません。徂徠は儒学の哲学者でありましたが、このように儒学を自分なりに解釈していました。六経と先王を基に、自分の考えを示し、自分の哲学と思想を現わしました。

こうして、個性的な人間が日本の思想の中に生まれたのです。

これはちょうど、ヨーロッパにおいて独自の思想を唱えていたデカルト－Rene Descartes（一五九六－一六五〇）－に似ていると思います。デカルトは一七世紀の重要な人物で、徂徠のように彼なりのアイデアを確立していました。デカルト

は「天につながっている人間はいない」と、人間の世界と天の世界を分け、人間の独自の世界をつくりました。徂徠も同様に天と人間の世界を分け、人間を切り離しました。人間の才と才知は天性のものではなく、現実全体を形而上のことと形而下のことの二つに分けました。デカルトも神と人間とを分けましたが、これはヨーロッパでは初めてのことでした。二人の登場する以前、現実はひとつのものであったのです。

天と直接の関係のない独自の人間が、徂徠によって初めて日本の思想の中に生まれました。伊藤仁斎も孟子と朱子のように、このような現実の分割をしていません。伊藤仁斎は常に、天と直接の関係のある人間の天性を主張していました。道は直接天から来て、人間の性と心とにつながりがありました。逆に、徂徠の道は天から直接のものではなく、間接的に聖人のみを通して天とつながることができます。

しかし、徂徠は天のことを否定していたわけではなく、この面でもデカルトと平行していました。デカルトも決して神を否定していません。同様に徂徠は「自然

の道理」、「天地自然の道理」、「天地人の全体の道理」、「理の自然の道理」等と繰り返しています。彼にも宇宙観があり、これは〈天運の循環〉（Cycle of Heaven）（太平策）でありました。

「総じて天地の道理、古きものは次第に消失せ、新き物生ずること、道理の常也。天地の間の一切の物、皆如此。古き物を何程いつまでも抱へ置度思ふとも、力に不叶こと也。材木も朽失せ、五穀も年々に出来替、人も年寄たるは死失て新き人入替ること也。又天地の道理、下より段々上て上になる。昇り詰たるは次第に消失て下より入替ること、是又理の常也。道理如斯…

一年の内にも、春夏は天の気下へ下り、地の気上へ升り、天地和合して万物成長す。秋冬になれば、天の気は升り、地の気は下り、天地隔りて和合せず、万物枯失る。」

（政談　Ⅲ：十二）

彼は〈弁名〉のなかでも、同じ様に述べています。

「天は解を待たず、人のみな知る所なり。これを望めば蒼蒼然、冥冥乎として得てこれを測るべからず。日月星辰ここに繫り、風雨寒暑ここに行はる。万物の命

を受くる所にして、百神の宗なる者なり。至尊にして比なく、能く踰えてこれを上ぐ者なし。故に古より聖帝・明王、みな天に法りて天下を治め、天道を奉じて以てその政教を行ふ。ここを以て聖人の道、六経の載する所は、みな天を敬するに帰せざる者なし。」（弁名）

彼は結論として「天なる者は、得て測るべからざる者なり…　知るべからざる者なり」（弁名）と述べています。彼の天についての考え方は、天を敬うこと、敬天という考え方でした。彼の「敬天」は、ラテン語で mutatis mutandis 、デカルトの“faith in God”に近いと私は思います。

宇宙の全てのものは新旧交代をする、というふうに、天の道理と天道と天命はみな存在するが、これらすべては、聖人を通して人間の道とつながり、具体化されたのです。先王聖人は中国の三代に天と結びついて道を創りました。後の人々は同じように天と直接結びつくことは出来ず、先王聖人の教えと道を学ぶことによってのみ、天の意志を理解できるのです。つまり、「先王の道」は、天によって裏づけられ、天によって神聖化されているのです。この聖人の創った道は、政治

経済の道、国家のinstitutionsであります。一言で言うと政治なのであります。このように、徂徠の道は外的で、物質的で、まさに人間社会の生活のためのものであり、礼、楽、刑、政であります。日本の歴史の中で、道は始めて政治的な道になりました。以前の徳川の儒学者－林羅山から伊藤仁斎まで－は皆、道徳的なsubjectiveな道を主張しており、長い儒学の伝統の中で、道は常に内的でした。逆に徂徠は、世界的な objective な道を主張しました。

聖人の道は人間のための社会の道で、天の道でも、地の道でもありません。以前は、天と地と人間の道はひとつのものでありましたが、大胆にも徂徠は、天の道も地の道も聖人の道から分けて、三つの独立した道を創りました。これは本当に革命的な新しい考え方でした。

徂徠は、道を聖人の、〈作為〉に帰したのです。彼の基本的立場は、「先王の道、古は之れを道術といふ。礼楽之れなり。」（辨道）の言葉にしめされています。

結局、実学（real learning）は、徂徠にとっては経済的な実際的な学問で、朱子

学の道徳的な理想的な実学と違います。彼の思想は、抽象的考え方から、確かなのは人間の道だけであるという具体的考え方に移りました。

当時の徳川封建制度は、中国の三代に樹立した封建社会をモデルとした完全な縦社会であったけれども、現代社会と同様に、制度が不十分であったので、徂徠は、亡くなる一年か二年程前に〈政談〉を書いて、八代目将軍吉宗に差し上げたのです。これは現代の言葉で言えば、「政治改革」についての論文であったといえます。現代の目で見ると、政談の考えは保守的でありますが、当時では現実的で前向きな考え方でありました。八代将軍吉宗は、おそらくこの長い論文に従って、国をまとめていったのですが、多くは明治時代になってから実現されました。

徂徠の思想の出発点は、一つは中国の儒学であったこと、もう一つは徳川の封建社会に暮していたことでありました。彼の想像力はこの二重の枠組みの中で揺れ動き、この二重の枠組みは彼の想像の〈種〉となりました。その結果、彼はこの儒学的な、封建的な枠組みから動くことなく、封建社会の中でもっと厳しい法律の制度を主張しました。古学の哲学の中で、中国の古い三代の先王聖人にもと

づいて、彼らの天からの知恵を使って、封建社会の正当化を見つけました。

このように徂徠の考え方は、いろんな面で現代的－モダン－でありました。これをまとめると次の七項目となります。

(1) 道は、人間社会の法律という道で、人間がつくり人間が従わなければならない道です。私的な理由で、この法律を犯すことは許されなかった。現代と全く同じです。

(2) 徂徠以前は、道は一つだったけれども、徂徠の道は一つではなくいろんな道になりました。今日は、何でも主義になる可能性がありますが、徂徠の人間の道は、日本の歴史における最初の主義－いわば最初の＜人間主義＞－でありました。

(3) 人間は、形而下の存在でしかなく、賢者か学者になる可能性はもっているが、仏や聖人という形而上の人物になることはできない。今日の人間も、教育と学問を通じて自分の才能を発展させることはできますが、キリストかブッダになる可能性はありません。

(4) 人間の性－nature－は、気質の性であり、形而下の性で、直接天とのつながり

はありません。性は良くも悪くもなく、善でも悪でもありません。「性は材なり」、「その才を尽くすことはできず」、今日の人間も、天のむすびつきを探すことなどせずに、形而下のものの中で理を探しています。

(5) 朱子学の理は形而上ではなく形而下であり、理は気質の中の法でしかない。徂徠の、器－理－主義は、今日の科学に近いといえます。

(6) 徂徠の実学は、歴史的な道を勉強する実学であり、彼の場合は言語学でした。中国の古典と中国の歴史と日本の歴史を彼の実学にしました。儒学の中ではあったけれども、合理的な研究だったので、将来のもっと経験的な合理主義への第一歩となりました。彼の後に山片蟠桃（一七四八－一八二一）や福沢諭吉（一八三五－一九〇一）、西周（一八二九－一八九七）等が続いて、現代の儒学、いわば今日の科学となりました。

(7) 徂徠は保守的だったので、変化は苦手だったけれども、歴史の変化を意識していました。そういう意味でもモダンの人間でありました。

このように徂徠はとても現代的であったけれども、純粋な儒学の時代である元禄、享保時代に生きていたので、その時代の枠から出ることはありませんでした。

彼は形而下の自分という、徳川時代の人間のための現実的な考え方を示しました。

もしこの賢い学者、徂徠が同時代に生きていたイギリス人のジョン・ロック－John Locke（一六三二－一七〇四）－に出会っていたら、彼の頭の中には新しい思想の〈種〉が生まれたのではないでしょうか？

なぜならば、福沢諭吉は一八六二年にイギリスを訪問した時に、ジョン・ロックの思想に出会い、新しい思想の〈種〉を得たからです。今日、壱万円札に印刷されているのは、そのおかげなのです。鋭い頭が、新しい思想の〈種〉をいただいたからなのです。

想像はいつも〈種〉の範囲内で動いているのです。

＊＊＊発表を終えて＊＊＊

今年はヨーロッパ人が初めて日本の種子島に来てから450年目にあたる。

先頃、種子島を訪れ、はるか450年前に思いを馳せた。これは私にとって日本とヨーロッパのかかわりの歴史を改めて考える機会となった。荻生徂徠は東洋思想史に現れた最初のモダニズムの思想家で、ヨーロッパの思想史におけるデカルトに似ているとよく云われる。私のライフ・ワークとも云うべき、東西思想比較の視点から見た荻生徂徠研究の一端を、第57回日文研フォーラムで発表する機会を得たことを有難く思っている。学者ばかりでなく、京都のいろいろな階層の人たちが、この近世の思想家に興味を持ち、フォーラムに参加されたことは、まことに嬉しいことであった。このフォーラムでコメンテーターの労をとって下さった日文研の笠谷和比古助教授に深く感謝している。日文研フォーラムの発展を祈りつつ。

1993年12月

日文研フォーラム開催一覧

○は報告書既刊

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO.ローターモンド（フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮（中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2．1．9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2．2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2．4.10 (1990)	グラント K．グッドマン（カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2．5．8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ（スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2．6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2．7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉕	2．9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉖	2.10．9 (1990)	ケネス・クラフト（リハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ（カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン（ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
㉛	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ（ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー（オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ（ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント（フンボルト大学教授・日文研客員教授） Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鴎外記念館」

㉟	3．9.10 (1991)	ドナルド M．シーキンス（琉球大学助教授） Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
㊱	3.10. 8 (1991)	王　暁平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12 (1991)	辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
㊳	3.12.10 (1991)	洪　潤植（東国大学校教授） HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4．1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン（デリー大学教授・ 日文研客員教授） Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4．3.10 (1992)	ジャン＝ジャック・オリガス （フランス国立東洋言語文化研究所教授） Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4．4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー（プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授） Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4．5.12 (1992)	ポール・マッカーシー（駿河台大学教授） Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4．6．9 (1992)	G．カメロン・ハーストⅢ（ニューヨーク市立大学リーマン広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長） G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ－徳川時代における武芸の発達－」
44	4．7.14 (1992)	杉本　良夫（オーストラリア・ラトローブ大学教授） Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4．9．8 (1992)	王　　勇（杭州大学日本文化研究センター教授・日文研外国人研究員） WANG Yong 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13 (1992)	李　栄　九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
㊼	4.11.10 (1992)	ウィリアム D．ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 －『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
48	4.12．8 (1992)	マノジュ　L．シュレスタ（甲南大学経営学部講師） Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐって－」
㊾	5．1.12 (1993)	朴　正義 （圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員） PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5．2．9 (1993)	マーティン・コルカット （米国プリンストン大学教授・日文研客員教授） Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

㊿	5．3．9 (1993)	清水　義明 (米国プリンストン大学マーカンド栄誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ　L. フリアー　(1854〜1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
㊷	5．4.13 (1993)	金　春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5．5．11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5．6．8 (1993)	姜　希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 ： 10世紀の日本と朝鮮 －科挙制度をめぐって－」
55	5．7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り － 平安朝文学の特質－」
㊻	5．9.14 (1993)	金　容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
㊼	5.10.12 (1993)	オフロ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・ 日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
㊽	5.11．9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・ 日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5 .12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ（ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授） Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 －南蛮美術から洋学まで－」
60	6 . 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン （ミシガン州立大学連合日本センター所長） J. Martin HOLMAN 「自然と為作 －井上靖文学における『陰謀』－」
61	6 . 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ（ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員） Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 －俳句の可能性を中心に－」
62	6 . 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク（フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授） Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
63	6 . 4.12 (1994)	リチャード・トランス（オハイオ州立大学助教授） Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学, 1880 ～1930」

****
発 行 日　1994年5月27日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048

問 合 先　国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課
****
1993　国際日本文化研究センター

■ 日時

1993年10月12日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部